

古里の特徴を凝縮

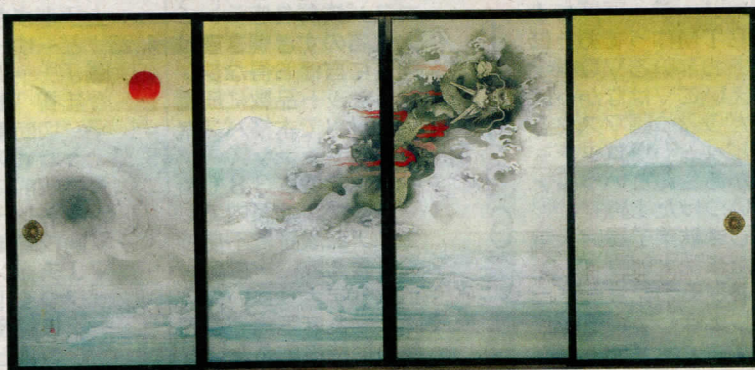
2018年下諏訪町の諏訪大社下社秋宮に再移築された、大社の風格を象徴する建造物「下社秋宮齋館別館」。別館の襖と戸袋は、日本画「湖國神」「湖國」が描かれている。作者は茅野市出身で日本美術院特待の岩波昭彦さん(56)＝千葉県佐倉市＝。古里諏訪の特徴を凝縮し、現代的で個性的な表現を目指して、訪れた人たちに重苦しさや圧迫感を感じさせないよう、極力淡い薄塗りに仕上げている。(宮坂早苗)

茅野出身岩波さん(特)日本美術院特待制作

極力淡く薄塗りに



戸袋絵「湖國」。ソメイヨシノやニッコウキスゲなどの花々を中心に構図を決め、「建御名方様」が、花の香りが漂う春から秋、全てをまとう冬の景色など諏訪の四季を一望する姿を描いている(25.7㍍×43.5㍍、4枚組)



襖絵「湖國神」。旭日や富士山、八ヶ岳を背景に下部には御神渡りを配し、中心に「龍神様」を描いている(17.5㍍×90.4㍍、4枚組)

襖絵の「湖國神」は、縦175・9㍍、横90・4㍍の4枚組み。旭日や富士山、八ヶ岳を背景に下部には御神渡りを配し、中心には畏敬の念を抱きながら描いたという「龍神様」を据えた。

戸袋絵「湖國」は縦25・7㍍、横43・5㍍の4枚組み。ソメイヨシノ、ニッコウキスゲなどの花々を中心に構図を決め、「建御名方神様」が花の香りが漂う春から秋、全てをまとう冬の景色と、諏訪の四季を一望する姿が見える。岩波さんは制作にあたり、どのように表現すればよいか日々思い悩み、17年10月には移築工事中の様子を見学。次第に構想を固め小下図を何枚か作り直し、数年掛けて下絵、本画を仕上げた。

6月、襖や戸袋に納まった

作品を初めて見た岩波さんは、「学んできた全てが自然に出し切れ、これまでにない感覚で描けたが、厳粛な雰囲気醸す部屋に納まると、自分の作品という感覚が遠のき、身が引き締まる思いがした」諏訪の地に思いをはせる一つになればうれしい」と話した。

岩波さんは多摩美術大学絵画科日本画専攻を卒業。その後、文化勲章作家松尾敏男さんに師事。この間、産経新聞社東京本社へ入社、美術記者会員となる。2014年諏訪大社に「平成・諏訪大社三題(五部作)」を奉納。19年には東京都の上野の森美術館で開催した「膨らむイメージ・躍動する生命力」スイス・日本文化交流展」を企画構成、出品し高評を博した。

諏訪大社では通常齋館別館は公開していないが、「要望があれば8月1日のお舟祭り以降、対応を検討したい」としている。

た。専門家に建物の調査を依頼したところ、「保存状態は極めて良好」「古式を重んじ、多くの崇敬を集める諏訪大社の風格を象徴しており、移築保存すべき」という見解を得て、秋宮の齋館南側に再移築された。



秋宮齋館別館

現在の参集殿の場所にあった、かつての「旧参籠室」。1903(昭和12)年に建

造され、木造平屋建て銅板ぶき約98平方㍍。95年参集殿が建てられたことに伴い、参籠室は払い下げを希望した茅野市参科中央高原の温泉旅館の敷地に移築された。その後旅館が閉館され、旧参籠室はそのまま残った。